

マルクス主義戦線

発行：マルクス主義戦線編集会

所在地：東京都文京区西長崎町10 三枝才 望月 彰

1965, 6, 発行

NO. 4

定価100円

内 容

- ★ 宇野浩二論の止揚はいかになさるべきか？
革命的な世界資本主義論をうらたてよ！

— 著者：尾田弘4, 現代資本主義と国家権と資本主義 —

水沢史郎

- ★ 左翼的労働運動の壊滅と敗北の現状

杉村宗一

今年一五五はやくも三年目を迎えた。今年
の社会党が革命を遂げし学生運動でもその
正統性がある。日本をさえておきよ——労働
斗争と国民会議の名のもとに糾合し、陣
営異なる各層の力を結集させた形勢に、
「六・一五」を始める資格が少しでもある
だろうかと、
労働斗争の敗北はよくて根絶されれば
ま打滅し得る者は、労働斗争と共産主義
者同盟の数を非難に掃括しようとする者以外
にない。
世界資本主義の革命の種を世に散らせば、
日共会議の敗北は斗争をまきおこせ、
大衆をまきおこすの敗北は革命の種を
撒きまくる思想も今や断く竹さつくとこ
に行きついた感がある。暴徒に生かされる
者——それはランドの敗北を意味し、主体的
に受けとめ、現状を正しく把握する目的
に採利存理論的様式の努力を枯らしよる。

〈注〉六項目

- ① 石炭調査団をつくること
- ② エネルギヤ政策審議会をつくる
- ③ 離職者対策を強化する
- ④ 出炭規模の拡大
- ⑤ 合理化のための金融的措置を取る
- ⑥ 最賃制賃金部会をつくる

「石炭調査団の報告は、これまでの合理化をいよいよという労働者側の約束が空約束に終り、中川鎮での合理化は、二の一年間に猛烈に進展すること、炭労は、どうすることもできなかつた。

今、二の合理化の進展の現状を、代表的な炭鉱調査本三井鉱山についてみてみよう。

三井六山のうち、美唄、山野、田川の三山を炭室に閉山（スクラップ化）にし、一万人の首を切る。二の三山は、いすも日本では有数の大型炭鉱である。更に残った三池、芦別、砂川の三山に於ても（ビルト鎮）六千円〜一万二千円の賃金下げ、向う一年間賃金の一割増上げ、期末手当一万円以下という空前の合理化案が準備されている。しかも、人員を、三割〜四割近く大中削減して出炭量は、逆に五割増すという労働者強化によって、能率（一人当りの月出炭量）は二倍以上に強化されるのだ。（注）

三井鉱山の合理化計画

生産高の増加	人員	能率
三池	154%	77% 28t → 60t
芦別	154%	82% 25t → 50t
砂川	129%	58% 21t → 50t
美唄		
田川		
山野		

割り目ので重傷を負う状態を現出している。かくて合理化の結果は、首を切らぬ者だけではない、辛うじて残った者をも苛酷な条件での労働に強いているのだ。二は、すべての合理化産業について一般的に言えることだ。

我々は更に、次の事実を注目せねばならぬ。それは、二のよう労働者強化、縮小の社会党左派、小口、小の敗北を伴っているということだ。そもそも六一一年秋頃から社会党をまさしく「構造改良主義」の流行は、炭労の「政争手争」に於て初めて、具体化の契機を与えられたのである。資本の合理化、改組に於いて、あくまで、労働者の利益を主張し、

「目理化、絶対反対」の姿勢を貫くのは、目理化は必死に抵抗し、必死に闘うのだ。これは、労働者側の公算と出るように思われる。二は、現在の労働運動は、その指導者の階級まで変化させてしまつたことを暴露している。確に自派の理論——あるいは、社会党左派の理論——は、資本主義に対する徹底的な憎悪、という以上の理論では行かない、とばかり、目理化に対する態度に於ては、次々と態度を取らぬことを。即ち、いくら、石炭が特種産業であるのと、エネルギーの転換の要請があるのか、それは、資本家の考へることであつて、自分達労働者側、そのために犠牲を二つある必要はない、目理化には、無条件で反対する。そのよう抵抗の力が自分たちの生活を守る唯一の道だ、と。三池の労働者には、二のよう「資本と労働」の論理が注入されて、それ以外に彼等の戦うべきの支柱と行つて来たのだ。ところが三池斗争の敗北は、二のよう行策はマルクス主義をも、労働運動指導部の腹から追いだしてしまつたのだ。曰く、「三池の敗北は、折衝手争一本槍主義の敗北だ」から「目理化には、客観的必然性がある」のだから、三池反対

こそ仕方ない、労働者の政策を対置すべきだ。云々。資本家の立場に立って、目理化を考へる構造改良主義——二はこそ、三池斗争の敗北は、社会党の左派階級的マルクス主義を暴露してしまつた後に在る。三池の敗北者の思想である。

二 新日空の完敗と労働の崩壊

総評民同は、もともと、朝鮮動乱の際にGHQが反共の労働組合を組織する目的で育成したものであつたが、五〇年以後の日本資本主義の蓄積過程は労働者階級をこゝ単純に御用組合化を許容することを得ておたつた。だが、現在、安部と三池の敗北によって、かくの如き、民間の巨額部分の脱落し、左翼的労働者が共産党に吸収される傾向が生じてくると、再びマルクス主義の反共民同育成政策が見られるようになる。目理化労働の敗北は、又三池より二の二のよう行策への転換、遂に言へば、

総評の員戚からの右傾化、妥協化を示すのである。日本の化学工業は、旧来の肥料生産を主として、のから石油化学への転換を迫られている。そのため、日東化学、昭和重工業大手の目理化案が次々と出さ

れている。行方でき、新日本窒素水俣の合理化反対
斗争は、化学労働者全体の命運を左右するものとして
あつた。

水俣争議は、昨三七年二月に水俣労働組合平均五一
八七円の賃上げを要求したことに始まる。九月の水俣
は、新日本窒素の独裁王田であり、熊本県の豊島村
労働者を基礎として、極めて低賃金で雇用し、これ
も職員と工員とをひどく差別した。「植民地経営的
労務政策」を取つていた。二のよりの苛酷な条件の
ことで、うかつ積つた労働者の怒りが長期のストを行
つ自然的な基礎にあつた。即ち、会社側は、賃上げ
要求に対し、大口解雇を待つて応じたのみならず、
更に、四年間賃金を釘付けよりという「半定賃金
構想」はるるのを出して組合に排戦状を呈し、さつげ
にのである。中労委の斡旋が不調に終つたあと、七
月二三日に会社側はロツワアウトし、翌日には、現
員を主として新労働組合結成を以、旧労は、全面無期
限ストに突入した。自化労働の豊島村ストライキ資
金に支えられて、水俣労働の斗争は「オニの三
世争議」といふに足程、激烈な労働の対立の様相を
示しなげら、あつたり、敗北した。それは何故か？

党の指導員二人の構成する「朝×三益」盛が「
さう一押しすれば自化労働はつひに」と強硬に主
張するのを抑えて、日経連専務理事の前田一が、新
日本窒素の吉岡社長を説得して斡旋を受諾せしめた
ことによつて、やつこのことで面目を保ち得た。こ
れは、組合の内容は、組合に有利である、と、総評、日
経連が口をそろえて宣伝した。実際には、「半定
賃金」をさつくり受諾し、おまけに三年間の労働体
裁（手付け）で敗北ということだ。これを約束するこ
いの組合側の全面的敗北を確信するのであつた。
自化労働の敗北は、現任の総評指導部が、三池斗
争まで曲いほひにあつた。資本に對して決然として抵抗
の姿勢を取るといふ思想を、多や、全く捨てて、
てこま、三ことを現実の形勢に則してゐる。

三 合理化の嵐に無防備の

非鉄・綿紡労働者

自由化と環境的打撃を受けるといふ以前、非鉄
金属では、最もドラス子ツクは合理化の進行してい
るのに対して、労働組合は全く無力である。二の三
の労働者は、もはや、組合に依拠して合理化に反対

それは、直接的には、オニ組合の抗争を、あくま
でピクで阻止するのではなく、あつたりとピクを解
いて、抗争を許してしまつたことだ。求定のピクは、
といひのは、以て、オニ組合だけで、即ち、以前の
三分の一の人員で生産を再開してみると、十分、採
算未だの生産量を達成してしまつたのだ。一労働
非常行無理をこしてだ。だが、それ以前の困難とし
て、ピクを解くことだ敗北への道であることは、総
評指導部にわかちあつた。それは、さうだ。総評指導部
には、はなはめから、三池の如く、とことんまで、「
抵抗斗争」を組合意志が全く持ちつたこと、それが
水俣争議の敗北をさたらしたのだ。畢竟、自化労働
の同じく合理化攻撃に直面する諸労働組合、水俣労働
の斗争に對して「同情ストでは、資金、カ、ハ、に、よ
る援助といふ、「ア、ム、ハ、式斗争」といふ方針で、地
ぬけから抵抗斗争を放棄してしまつたのだ。

口く、水俣労働は完敗した。だが、更に忘れて
はらばい事実がある。自化労働が、太田総評議長
出身労働組合であり、後自身その委員長であるといひ
のである。太田は、敗北が必至にはなつた昨年十二月
熊本にべつ、三つして、必死の幹事工作を、自民

いふ、といひ、このことを考へていふ。自社の希望退
取競争に對して、其果敢を上回る希望退職者があつた
といひ状態である。

非鉄最大の企業たる日本鋼業の三七。〇人の首切
を、組合は、あつたり承認した。三七年中に全鋼業
労働者五〇。〇人がヤマを捨てた。だが、自利を顧
みがあるわけではな。自合理化に反対しても勝目は
以上、退職金を貰える時に賣つておくといひ、
唯一の目当てである。

勿論、全鋼業にそこは、三つではな。だが、
六一年秋から始つた「綿業政策確立斗争」は、
のは、労働の「政転斗争」方針を真似て「政策」
を要求したものであるが、その政策は「事前協議制
を設けて」「政府は、非鉄の支持面格制度の保護政
策を強化せよ」といふ会社だ。これも不思議ではな
い。その内容のものはあつた。二つでは、お茶を
こいて三つにさうだ。

繊維労働者も全く合理化の前に、はびりてしま
いでいる。

化学繊維の隆盛によつて、従来の綿紡は大きな打
撃を受け、既に数年来の不足にある。アメリカの自

本の鋼製品イコトは、鋼筋の生産を全く暗くしている。鐵維産業は、大規模の合理化によっての升延命である。二のようは情勢の中で昨年春、鐘紡に比しては前切、配管鋼の自産化は、鐵維産業の自産化の端緒を切り開くべきものであった。全労系の労組が、二の力を、あつたりと受諾することはいりまではない。

四 社外交の首切りで不況を切りぬける鉄鋼資本と斗ふことを知らぬ

鉄鋼労連

昨年後半から今年にかけて、最も深刻な不況に見舞われ、鉄鋼である。

一九五二年からの第一次五年計画で一三〇〇億円を投じて市トストリツス、ミルからコールドストリツスミルへの転換を中心として既存の工場設備を拡充した鉄鋼資本は、五五年からの第二次計画では、四五〇〇億円の巨額の資金をつぎこんで、各社競って新鋭一貫工場を建設し、飛躍的に増大した生産力は、独占資本相互の競争を激化している。前も、六〇年と七〇年にかけての第三次合理化計画

では、二兆円を投じて、粗鋼生産四八〇〇万トンにまで、またリリについて二番目の大鉄鋼資本に成長しようとする。だが、鉄鋼の過剰生産は、すでに、昨年頃から顕著に表面化してはいる。鉄鋼価格は暴落して三割、五割の減産を実施し、不況打リリを結んでくるが、リリルの完全実施は行い得ない。かくて鉄鋼資本にとって、旧式設備のスクラップ化による合理化は不可避に行っているのであるが、それには必然的に鉄鋼の下請産業の中堅企業及び、そのなか、いりゆる社外工に犠牲を強いることになる。本工の組合員の首切りによって表裏を起すこと行く下請業の注文数量を減らすことによる資本主義的備理に力づく方法は、實質的の首切りは可能に行うの。と二の現実には、下請企業とはいって、親企業は一つは力づく専断であり、従って社外工は直

鉄鋼資本と斗ふことを知らぬ

下請業の注文数量を減らすことによる資本主義的備理に力づく方法は、實質的の首切りは可能に行うの。と二の現実には、親企業は一つは力づく専断であり、従って社外工は直

排には下請業者に雇われたいと鉄鋼資本の労働者と斗て何らさつたのはいりである。このようは社外工（八幡以外に臨時工もぼう大）は、どの鉄鋼資本にも本工の田圃から、ほぼ同数存在する。（注三）社外工は、好不況に依りて勝手に調整、整理されるの升はらず、賃金に依りて本工の半分以下に落ち

(注二)

社外工の占める割合(1960年末)

	社外工の占める割合(1960年末)	
	本工	社外工
八幡製鉄	48000	40000
富士製鉄	7300	7200
住友製鉄	11000	4000
神戶製鉄	17700	7300
金沢製鉄	9300	2200
神戸製鉄	9100	4900

(八幡で臨時工がいりないのは、社外工を大に利用する利益の巨額に、臨時工を最上、全部本工に切りかえられたのである)

いり極めて低賃金で使用できるので、各鉄鋼資本とも膨大な労働者を社外工としておくののである。

(注四)

八幡製鉄では、製鉄本工三七〇〇〇円に對し、社外交は、この四二%の一五四〇〇円。このうちの三〇〇〇〇〇〇〇〇円は残業手当による収入であつて、残業によつて、辛うじて暮らすにたいていこの下請社外工の現状である。

八幡での社外工首切りは、昨年六月まで、二六〇〇〇人に及んでいり。三人に一人は職を失つたといりまことに巷に失業者があつていりといり八幡の現状である。

二のようは首切りに對して、雇人の抵抗をできな二の二——二の二、資本金、社外工制度を二の二に打ちこく理由であつた。ちよつとて戸オレグ活動も雇人のスパイに直ちに被害を以てまうといり。また、死の町と化していり。

その二は、二のようは資本の攻撃をまともに受けていり社外工に對して「本工」の組合は、何らの反抗もいりない。鉄鋼労連は与では、本工と下請社外工といり日本の「二重構造」を最も極端な形で表現していり組合である。本工は社外工に對して、相対的に労働貴族の地位にあるといり事実は、客観的に必然性をはたつては、本工と社外工を介して統治せよ、といり資本の労働政策の勝利を物語るものである。数百人の日共黨員がいていり八幡製鉄の労働者において、二の二が最も極端であるといりのは、日本共産党の非革命的な本領を端的に物語っているといりいり。八幡製鉄組合で、組

身に付いてマニホートを取ったところ、合理化に「
備けずべきだ」カヒー・九%、「備けずべきではない
」が二五、四%であったという。鉄鋼労組は墮落
すると二つまで墮落した。

だが、鉄鋼労連は、昔からこのように墮落してい
たわけではない。畢竟、日鋼室橋や尼鋼の斗争は、
戦后日本の労組運動において最大な成果であった。
三二年のいわゆるゼロ解答に対して、ついに反響を
響かした敗北こそ、鉄鋼労連にとって致命傷であ
ったのだ。三三年には、春闘から夏にかけて労組の
新斗争において、その后数年にわたる階級戦の火の
玉が打ちられ、これもその最初の大きな敗北を契機
として秋には、鉄鋼資本の八幡、富士、鋼管の
ゼロ解答の挑戦状に好んで鉄鋼労連も敗北すると
いう事態が生じたのは、資本の総評主要産業に対
する不 意の意を悟って個別撃破せんとする意図
の表われであった。鉄鋼連はそれ以後、弱仕の一端
を占めていた。昨年春闘においては、鉄鋼が一
ぱん怒沢に打ち、というだけの理由で春闘のトツ
パッターにさせられたのであるが、もとより、鉄鋼
労連にそのよりの力量があるはずはなく、鋼管、鉄

五 露骨に御用組合とした電機 労連とみじめな電機労働者

現在最も急務に「右旋回」しているのは電機労働
である。電機労働は三三万人で全労の中を占める大単産
である。これも最近、電機産業の発展に伴って電機
労組者は年に三割近くも増加し、機械産業労組の
二割を占める急務に労組者増加増加している
産業である。(全産業平均では、年一割の増加率)
昨年十月の電機労働大会には、アメリカ打の労組の
全労組AFLECIOの副委員長がアメリカに出席し
、フネテイのメッセーシを請うた。その内容は、
中執、中派(社民党)及び中派派(一掃)、「中
派自由労働連」の独裁体制を固めた。組合本部には
フネテイの肖像画が掛かっているという。電機労働委
員長は、フネテイ、ライシマワの対日労働政
策の先鞭をたつて代表者で「大規模クルースレ」
の組織である。アメリカ打はよくに電機労働の「AF
L・CIOの化」に力を注いでいるのは、近年、アメ
リカのG・P・ウエス子シムハウス等の諸資本が日本
の電機会社と資本提携を活発に開始した二こと、三

では、資本の必死のストライキで叩きの前についに
スト権を確立することだでさばった。この時、会
社側は、役付け工員五〇〇名に對して、一人二人又
つこのストライキ反対者をオムクさせ、二と助員七
〇〇の票を占めて三三。六対二〇八一でスト権確
立投票でスト権に成功したのだ。鋼管、鋼鉄は、
川鉄についで大組合であり、それまでのスト投票で
は、つねに高率で批准を成立させていた組合である。
その、鉄の敗北は、鉄鋼労働の弱体化に現れを示
して示している。住反尼崎、八幡等の鉄鋼労働内の一
強に組合において三、五。六%、五。〇。七%
で幸の心でスト権を批准させたというありさまであ
る。

なお、昨年の春闘は、日経連の前田一から「今年
の春闘は、実力行使の面でも、予想外の低調であつた
」とほめらる程、そまつな内容であつた。
クイル軍需を日本にやらせるためには、さうしても
反共の労組組合を育成しておかぬはならぬという
理由があるからだ。

それでは、膨大な電機労働者は、AFLECIO
化する程の物質的基礎を、ついているのか？ その正
反対である。電機労働者七三万のうち、三分の一は
残業を始めて一万円以下の低賃金であり、二分の一
は一万二千円以下であり、二成は、全産業の中でも
最低の都類に属する。二より「前打の厚生産
」にも支障をきたすほどの低賃金に呻吟しているの
は、会社の労務管理が、労働者のいかなる反抗をも
封じてこまっしているからであり、更に、組合が御用
組合化しているからに他ならぬ。自立の
大量整理も何の抵抗もなく会社の意のままに
た。

六 粉砕された日教組と、マルシヨアミの 教育支配の完成

現在最もみじめに敗北しているのは、日教組であ
る。組合員四二万、三七七年度の日教組は依然とし

之、総評最大の単産ではあるが、こぼや、日本のス
ルミヨアミを脅かして昔の面影に全く行い。勤務
評定の繰上げとこの学月スミに對しては、三
六年には、いくつかの地方で反對手争ひが起る
の、昨年「柔軟戦線」に打ちかへ、根本一
藩の文部省に完全に出た。以て、現場活動の低調
に行つた学校の取組望は、校長の監視の目、おど
おど、無意味な收斂的思想が支配する。二の上
へ行かぬ現象をつくりだしたものは、他方らぬ
三二年から三三年秋に於ける勤評手争ひの敗北であ
つた。

大産文相のもとで、教育三法(教職員政治活動
の禁止。オミ者の煽動の禁止)を定めて日教組の「
外濤」を埋め、看護文相は、教育三法(新教員法、
教科書法、臨時教育制度審議院法)を策し、結局、
三二年六月の山口で、警備まで出動させて、強引に
新教員法を成立させた。教育委員を公選制から任命
制に切りかえた。

勤務評定は、始め、愛知県教育委員会が財政不
足から、教師に勤務評定し、成績の良い者は只に昇
給を認めるといふ思ひつきが、教師の規則に絶大な

る結果をもたらすことを発見して、自民党が、単
的に実施することになりたのである。戦前戦中に成
長の日教組から教育支配権を奪い、オミ、二水
が自民党又ルミヨアミの意図である。勤評手争ひ
闘争の闘い、愛知の手争ひ惨敗を喫した。三三
年八月の日教組大会で、狂気の平塚派が、条件手争
を主張する右派(社会党)の官之原に書記長選で敗
れることによつて敗北した。この時、日共は、日共
党員を書記長に推しやるべき何の援助もしないは
し、並に、間接的に官の原を助けて手争ひの教化を
抑じた。

昨年の日教組大会は、中絶委員の縮小を定め、日
教組は、身や、組織、内容共に細体化してきた。
文部省は、更に、教科書の国定化(無償配布)、そ
の中心に他方ら行いしを策動してゐる。教育は完全
に又ルミヨアミの手中に落ちようとしてゐる。暗
黒な日本の教育をお、い尽さうとしてゐる。

七、最近の春斗と経済手争ひの停滞

昨年の春斗は、既に鉄鋼労連の項で述べた通り
「鉄鋼労一番拵だから」といふだけの理由で、鉄
連をト、スバツターに仕立てよつて失敗した。
山口だけ、勤労単独組と日鉄との年末手争ひの一
因を結ぶさつたばかりで、突発的に、三、三ノスト
に突入して「中保以来のスト」をやり、巨額の、大
量処分以外の行にものを獲得できなかった。エゴ
ノミストのつぎのよりは批評は全く正し。

「この時(三二年の新野手争ひ)、新野管理部長を
こていたの河村理事。河村労政は、それまで、ウ
ム相通じていた民間在来とのつらさを除々に断ち
切つていつたように思われる。昨年、三、三ノ年
度末手争ひでは、当初は、おぼろげに、ついに妥協し
た。

山口は、昨年十一月に発起したオミ組員の全口組
織する新山口(血三〇〇人)を無視し得なくはな
てゐる。東京の墮落が多なるは二ことその一
因ではあるが、オミ組員に規則を以て、思ひ切つた
左翼的方針を打ち出すべく、又また、それ

が、山口民間の右翼的方針の口実とする。

オミヤ改正、スロドマツス等ですすすすすすす
七に於ける山口労連は「日民の巨額の日鉄」等といひ
新野はスロドマツスに打ちかへるも、一歩に右傾化
傾向のものは、山口の三〇パーセントを、日本軍関係
加算してゐるからである。

今年、春斗はどりであった。手争ひのいり手争ひ
に終つた。といふのは、一口に言つて今年、春
であった。

トッスバツターにたいしては公労連に對して、当初は
「ロコ解散」をもつて臨み、「ロコ解散打倒」の一
時限実行行役(二月十五日)をこなしたものの、その後
の方針は、いかにして公労連の仲裁をとりつけるか
といふことと精一杯であった。「仲裁移行を要求す
るスト」といひ、又つて聞いた二つの行い敗北主義
的方針を打ちだした。実際には、何もことはない
まに完全に当初のペースに翻弄され、四月の地方選
挙の巨額に手争ひを打ち切らねばならぬ。公労
協はスト権を奪取して、「スト権奪取の何年針
風といひのち、毎年示はるが、現地の林産では
何年たつても、スト権奪取はおぼろげなだけ、又

各社内にてマニピュレートを取ったところ、合理化に「
備けずべきだ」カヒ一・九%、「備けずべきではない
」が二五、四%であった。鉄鋼労組は墮落
すると二つまで墮落した。

だが、鉄鋼労連は、昔からこのように墮落してい
たわけではない。畢竟、日鋼室福や尼鋼の斗争は、
戦后日本の労組運動において最大な成果であった。
三二年のいわゆるゼロ解答に対して、ついに反響を
響かした敗北こそ、鉄鋼労連にとって致命傷であ
ったのだ。三三年には、春闘から夏にかけて労組の新
闘争身において、その后数年にわたる階級戦の火の
口が打ちられ、これもその最初の大きな敗北を契機
として秋には、鉄鋼資本の八幡、富士、鋼管の
大口解答の挑戦状に好んで鉄鋼労連も敗北すると
いう事態が生じたのは、資本の総動員と生産に對
する不 意を待って個別撃破せんとする意図
の表われであった。鉄鋼連はそれ以後、弱仕の一端
を占めていた。昨年の春闘においては、鉄鋼が一
はん好況だから、というだけの理由で春闘のトツ
パッターにさせられたのであるが、もとより、鉄鋼
労連にそのよりの力量があるはずはなく、鋼管、鉄

五 露骨に御用組合とした電機 労連とみじめな電機労働者

現在最も急務に「右旋回」しているのは電機労連
である。電機労連は三三万人で全労の中を占める大産
業である。これも最近、電機産業の発展に伴って電機
労組者は年に三割近くも増加し、機械産業労組の
二割を占める。最も急務に労組者増加している
産業である。(全産業平均では、年一割の増加率)
昨年十月の電機労連大会には、アメリカ力の労組の
全国組織AFL、CIOの副会長アマリイが出席し
、アネソイのメッセージを述べた。その内容は、
中流から左派(社会党)及び中流派を掃いて「中
原自由労連」の独裁体制を固めた。組合本部には
アネソイの肖像画が掛かっているという。電機労連香
長長村氏は、アネソイ、ライシマワの対日労政
策の先鞭を以つて代表者で「大衆館クルースト」
に出席している。アメリカ力なくして電機労連の「AFL
・CIOの化」に力を注いでいるのは、近年、アメ
リカのG.P.ウエスチンがハウス等の諸資本が日本
の電機会社と資本提携を活発に開始していること、三

では、資本の必死のストライキで叩きの前についに
スト権を確立することだでさげなつた。この時、会
社側は、役付け工員五〇〇名に對して、一人二人又
つこのストライキ反対者をオムカさせ、二社と職員七
〇〇の票を占めて三三。六対二〇。八一でスト権確
立投票でスト権に成功したのだ。鋼管鋼鉄は、
川鉄についで大組合であり、それまでのスト投票で
は、つねに高率で批准を成立させていた組合である。
その、鉄の敗北は、鉄鋼労連の弱体化した現状を不
明にして組合において之を、五〇・六%、五〇・七%
で幸ひの心でスト権を批准させたといふありさまであ
る。

だが、昨年の春闘は、日経連の前田一から「今年
の春闘は、実力行使の面でも、予想外の低調であつた
」とほめらるる程、そまつな内容であつた。

これは、膨大な電機労組者は、AFL・CIO
化する程の物質的基礎を、ついているのか？ その正
反対である。電機労組者七三万のうち、三分の一は
残業を始めて一万円以下の低賃金であり、二分の一
は一万二千円以下であり、二社は、全産業界中でも
最低の都府に属する。二社より「電機労連」の厚生確
ににも支障をきたすほどの低賃金に呻吟しているの
は、会社の労務管理が、労組者のいかなる反抗をも
封じてこまわっているからであり、更に、組合が御用
組合化しているからに他ならない。自立の
大量整理も何の抵抗もなく会社の意のままに
た。

六 粉砕された日教組と、又ルミニアミの 教育支配の完成

現在最もみじめに敗北しているのは、日教組であ
る。組合員四二万、三七七年度(日教組)は依然とし

五年にかけこの階級戦に於ける革命者階級の敗北である。

二の杯は情況に置かれたゆえにわれらの任務は、革命階級、指導階級を、自らの階級と心臓で結合せよといふこと以外にあり得ない。

我々は、残さぬ唯一の道を是非をわけて追求せねばならぬ。

宇野原論の止場はいかになさるべきか？

(書評)

革命的な世界資本主義論をうちたてよ。

——岩田弘著「現代資本主義と国家独占資本主義」(『經濟評論』六月号によせて——)

★ (水沢史郎)

「すべてが眠つていた。イギリスは深い深い眠りに陥つていた。——町には人のしげに人があふれ、ホスターにはワリケットの試合と、国王の結婚式のことが出ていた。人々は山崎情をかかづてトルファル——ドイツが、平穏な小市民的生活の広範な展開の中に、

ガト広場に散歩した。広場には鳩が群れ、赤いバラが咲き、巡査は青い服を着ていた。——この底知れぬ眠りから、イギリスが目覚めるのはいつなのだろ。うか？砲撃の響きではじめ、危村に気付くのではあるまいか？」 (『ジョージ・オーエル、カタロニア讃歌より』)

一九三七年、傷つてスペイン戦線から帰つたオーエルは、内社のスペインと、ナチズムの危村に全く無関心なイギリスとの余りの際立つた対比にぶどう汁で、「カタロニア讃歌」の末尾を、このように結んだ。

恐惶は、資本主義社会の全構造を収縮させ、資本の倒産と整理を強制する社会的な突然の破局として到来せず、重工業を軸としたドイツ資本主義の急激な蓄積は、小ブルジョワ並びにプロレタリア上層部に、将来への安

定した期待を托かせた。

だが、世界資本主義の現象が、その市民社会の日常
生活に於いて、いかに平穩無事であらうと、資本の動
向の基本的側面を捉え、そこから明確な結論を打ち出
すことこそ、マルクス主義者の任務なのだ。レーニン
が、レマン湖のほとりに住み作るも、オニインターに
対して、帝国主義戦争の危殆と、それを防ぎ得なかつ
た場合戦争を内乱に變化せよと、叫び続けたのも、一
九〇七年以来のドイツ、イギリス、アメリカを軸とし
て資本輸出の飛躍と、四洲市場再分割の斗争の展開と
いう世界資本主義の矛盾の軸に着眼し、こゝから大
戦の危殆を洞察したからに他ならぬ。又、通称「勃
農独裁」といわれる、レーニンのロシア革命の、は、
すでに世界資本主義は、后進諸国を工業化させていく
金融的中心を喪失し、逆に、重工業国家と非工業国家
の格差を激化させる金融的役割しか、イギリス金融市
場が果しているという、世界資本主義の世界編成の
杆樞を喪失し、競争のロシアにおける反映以外の何も
のでもない。レーニンとして、その世界資本主義の世界
体制の杆樞的解体と、ロシア資本主義の位置付けを、
かく明快にさせていたわけは決して奇門の奇であるが、
然し、彼がマルクスから資本主義の革命的分析を受け
つこうと経済学の研究に努力を集中したことは、単に
マルクス哲学しか理解しえなかつたブルジョア、あ

るいは、政治的直観にはレーニン以上のものをもちろな
うも、政治的直観を資本主義の分析を基礎にして科学的
なマルクス主義の綱領にまで高めえなかつたトロツキ
とは異つて、帝国主義は世界資本主義の矛盾抗争の焦点
（帝国主義戦争）とロシア革命について統一的見解、形
成を可能にしたのであつた。
マルクス主義とは「資本主義社会におけるプロレタリ
アートの史實的直観をバネとし、プロレタリアートが自
己の本懐を反省する」一様明秀し黒寛一などというもの
ではなく、まさに資本主義の危殆を、その幹葉において
暴露するものに他ならぬ。
我々は、資本主義のあれやこれやの局部的現象に目を
奪われるのではなく、世界資本主義の矛盾の核心をどう
ぞ、こゝから大胆に結論をひき出すべきなのだ。そして
そういう意味において、イギリスの貨幣市場を中心とす
る世界的な資本主義編成の杆樞の崩壊の結果、ロンドン
資本市場が国民的資本市場へと分断せられ、並にロンド
ン貨幣市場は、各口の重工業独占体の不均等発展を激成
させる要因に転化し、こゝに各口資本市場を背景とした
重工業独占体の世界市場再分割の競争が開始せられ、そ
の必然的結果として第一次大戦は生じたのであり、オ
二次大戦も、第一次大戦の荒廃からの復興プランそのも
のが形勢せざるをえなかつた矛盾の集中点であつた以上、
第一次大戦以後の資本主義は、帝国主義戦争と内乱の時

代であるという意味において、国家独占資本主義とい
われぬはなほ、としている岩田弘氏の論文には、我
々は最大の注目をおくべきであらう。

日本における安保、三池斗争という一大階級決戦に
日本の人民が勝利し得ず、敗退した時、その斗争を最
も中心的に、主体的に斗つたはずの共産主義者同盟の
内部に、革命の敗北がもたらすおそれるべき思想的動揺
と、思想的混乱、そして理論的背離がもたらされた。
その一部は、これがまさに日本資本主義のそれ以前の
全過程がそこに収斂し、それ以降の全過程を左右する
階級的決戦であり、それゆゑに、安保斗争の杆樞は、
共産主義者同盟の安保斗争に対する独自の観念の具体
的杆樞であるけれども、この立場に立ち得ず、単に
自分達が斗いぬいた杆樞が出来たわけではなく、スレ
トの総てを、一切合切をくりすることによつて安
保斗争の問題が無条件に迂回去らうとした、旧戦線
派、及びプロレタリア通信派の諸君である。彼等は、
安保の敗北と、敗北がもたらしたこの内部的混乱に対
して、主体的にかゝりあり得る以上、身をひく以外
に、杆樞の仕様がなかつたのだ。そしてその方法は、
安保斗争には全く何の関与もしえず、これを単なる一
政治斗争として学生運動の片すみで適当にやつていた
マルクス、自己を一体化させるといふことで最終的に

完成した。だが、この部分には、まだマルクス主義という
言辭をうろつてはいるけれども、救いがあるところでは
なく、案にはなほ毒にもなりはしるりのだ。

だが、この様にフロントの一切を否定して、ただ、
一八〇〇年代のマルクスの文章を反復するといふ無内容
的マルクス主義者とは別に、この安保三池斗争の敗北后
のおそれるべき決断を反映して、マルクス主義そのものを
否定し去る理論が、旧共産主義者同盟の中央部にこれ一
部の者に、横行している。しかも事はそれだけではない
でいなり、強力な日本のマルクス経済学に対して、い
ゆる近代経済学が至るところパツコし始めてはいる。その
近経思想は、宇野経済学の内部にも浸透し、その一角（
宇野野井）を崩した、という事によつて、あたかも近経が
宇野経済学を止めたかの如き外観を呈え、近経への秘
行に一乃の拍車を与えてはいる。（註一）

（註）近経の性格は一言でこれを言うならば、現代社会を
全体として統一的に把握しようとして、資本主義的
杆樞の一部を詳細にうかがう、その一部の微細な検討
から逆に全体を推察するといふものである。そして
とにかく、資本主義の歴史的展開の一部一時期をこ
れば、常軌的願望にとつては、矛盾の累積というよ
りも、定定的累積の平穩な推移がみられるかも知れ

ぬ。近世はこの部分的現象にしがみつき、資本主義世界の全体としての統一的把握から完全に目をそむけるのだ。だがそれは、スペインの内乱が燃えさかっているとき、イギリスは平穏な福祉国家として安泰であるとして疑問をかつたイギリスの労働者階級の論理であり、又、ドイツ資本主義の重工業における巨大な蓄積をみて、そこから、帝国主義的争奪戦と戦争の危機を指し示すのではなく、世界は、巨大独占体の下に、超国家的統合され、そこにおいては、帝国主義国家間の対立はもはやありえないとしたカウツキーの超帝国主義の論理——と同断である。

おしるべて、理論は二つしかないのだ。真に資本主義の危機の展開を暴露する革命的マルクス主義の理論か、又は、危機の真の所在を隠蔽する理論か、である。ベルンシュタインもカウツキーも、そして近世もかたむるところはなかり。V

二の近世に身を帯るることによって、安撫斗争とその敗北のもたらした現状の打破という問題からも、さらに別れを告げた連中は、こう弁解する。

「マルクス主義の概念に立つ限り、世界の経済学者と共通の場で論争することかできなかりしと。」

意匠をもつ必要はなりのだ！又、もてるわけがなかりではなかりか。更に言う——「マルクス主義の概念では世界は把えられなかりし——然るば、現代社会は何かなる社会だというのか。

現代は、一考に、それ以前の資本主義の歴史的展開と切断されて理解されるものではない——こんなことは、歴史的観念があれば、分つて事だ、しかし、統じて、「資本主義は変つた」とする者にとつては、分つてはなかりだ。近世の諸君は、もはや現代は資本主義の概念によつては理解し得ないとするところから、現代を資本主義の必然的展開という立場に立たず、それゆえ、資本主義の歴史的展開という問題意識は、完全にぬけおちているのだらうが、彼等がそういう立場に敢然と立つと言うの存る、一体いつ、何かなる歴史的契機によつて、帝国主義は、非資本主義的现代社会に変形したのかをこそ、論証すべきであらう。



我々は今、ある程度、宇野聖道学の性格と我々の関係を考へてみる必要がある。

宇野教授の東北大学時代からの教えろであり、その後、も宇野教授によつて東大教養学部へ招かれ、リカアドウからマルクスへの理論的推移について野心的な諸論文を提起してきた宇野井野郎氏が、昨年来近世に変身した事実と、その理論に対する批判は、我々マルクス主義戦線が展開してきたところであつた。この宇野井氏の転身は、理由のなかりことではない。それは彼が、アメリカ資本主義の現状分析を始めようとした、まさにその時裏におりて起つたのだ。「アメリカ資本主義の成熟と停滞」という昨年四月の論争にのつた論文で明白である。資本論、原理論を長い間宇野氏の下において研究してきた宇野井氏のアメリカ資本主義の分析の最大の欠陥が、まさに、「価値論のなかり」経済学に墮してはなかり、何とどう皮肉な事実であつたのか。だがそれは、宇野井氏一人の人の宇野聖に対する理解の誤謬性の問題にすべて帰着せしめる事は出来なかりのではないか。向題口むしる、宇野原論は、帝国主義時代から現代に至る資本主義を分析し暴露する武器としては十全ではなかつたというところ、宇野三論は傍におき去りにされて、原論とは全く別の世界で、分析を積み重ねるといふ結果に陥つたとみるべきであらう。(宇野井聖道学において、原理論が語られて

ける個所はいくつがある。「現代を消入し」だが、それは、断片的に、かつ、現実とは関係のなかりものとして、語られてはいるのだ。」

然るば、宇野原論の限界と、その方法論の限界は、どこにあるのか？

「我々はマルクスを知らなかつた事実、帝国主義の時代を知つてはいるし、」と資本論と社会主義」として、段階論の区別を説いた宇野弘敏の、その「帝国主義の時代を知つてはいるし——帝国主義の時代の事実を基礎として資本主義の本質論と現実論を再構成する——」の言が宇野自身にも更に深刻な意味においてはぬかえらざるを得なかりというところこそであるのだ。

宇野原論の問題は、この帝国主義段階の資本主義を単に帝国主義論の対象としてしか考慮せず、資本主義の原理論の対象から格差してしまつたというところにある。即ち、経済学方法論「(経済学大系1)に於いても、本るは宇野の全著作において、くり返しおのれてはいるように、原理論は、資本主義の關係の純粋化の傾向を示してはなかり一九世紀中期のイギリス資本主義の發展傾向を客観的基礎として、この純粋化の方向を極限化した、純粋なる資本主義社会を想定して、そこに於ける資本の運動法則の解明を行ふものとして

た。彼は、純粋化の客観的傾向が存在したという事に重点をおき、その事実を基礎にしてゐるのだからこれはマック・ウェーバーの観念的モデル（理想型）論とは異なるとしてゐる。だが、我々が資本主義の本質論を展開する時、資本主義が没落を開始するといふ一九世紀末以来の資本主義の事實は、これを本質論の対象から切斷して、内面化しなればならぬ、出来上る議論は、資本主義の一面面をしか反映してゐるものになるのではなからぬ。我々が扱う対象は、歴史的生成体としての資本主義が、その歴史的發展の一時期一地方に於いて微細ではあるにせよ純粋化の傾向をたどつたとつらのが事實であると同様に、一九世紀後半以来の熱と没落の時代に入つたのも事實なのだ。資本主義は、全社会的生産関係を自らの資本家的生産関係の内部に包摂することは出来なかつたといふ事實——この守野原論のつら純粋な資本主義社会とは全くつらつらの本質こそ、原論内部に反映されてゐなければならぬのだ。

資本主義的生産は、歴史的に言へば社会的生産の主体にはなり得ても、その総体にはなり得ない——又、なり得るものではない。社会的生産の全体になり得るならば、それは永久的な社会的生産関係をたつた。それは、商品関係が、一國の歴史的生産力の水準のときに内部に生産関係を資本家的生産として確立し、逆にこの資本家的生産を動力にして、商品形態をもつて他の社会的生産に働きかけ

それをも商品関係によつて得てゆく、そのようなものではないのだ。

そもそも商品関係は、マルクスも言う様に、「共同体と共同体の外部的接触史に、共同体の剰余の生産物の交換として發生したものであり」それは共同体内部の本来の各人固生活の再生産にとつて必要を剰余品の関係として生成したのである。商品品の交換は、發展物に貨幣に、金銀という働き生活にとつて必要を剰余品がなつたといふのは、偶然ではない。その商品関係が共同体の外部的接触史に、内部に侵透したとき、それは共同生活の崩壊と、剰余物の関係によつて人間生活が律せられるといふ、いわゆる疎外された歴史が開始されたのだ。

本来商品関係は、人間の生産活動に対して全く外部的なものであつたのであり、資本主義社会とは、剰余物を貨幣の盲目的運動によつて社会的生産自体が律せられるければ、他に自らを律する何の基準もなからぬといふ完全な転倒せる社会形態なのだ。

かくしてこの商品形態は、共同体の接触史に發生したものであり乍ら、その特有の他に對する自己の運動体系は、自己の内部に、商品による商品の生産体系を形成して始めて可能たつたのであり、資本主義的生産はその始めから、他の社会的生産を前提とし、これに對する商品

形態をとする働きかけの過程に他ならぬ。資本主義とは、そういうものとして歴史的に生成し、他の社会的生産に相関係する社会的生産の一つとして社会的生産の主体へと生成してつたのであり、社会的生産の全体を包摂するものとしては、資本主義は存在しなかつたのである。

資本主義の原理論は、たしかに、オニ卷生産論において、資本が社会的生産の全体であるとして資本の運動を展開する。だがそれは、資本主義が部分的社会的生産体であり乍らも他の社会的生産に對して自己の関係を以つて能動的に作用する社会的生産の主体として、累進循環の枠内によつて資本家的生産関係の拡大を編成せしめてつたといふ中心とする自由主義経済の世界資本主義の反映と見るべきなのである。（註）

（註）

資本主義は、累進循環プロセスに端的に示されるように、それ自身の生産関係と生産力の対立関係によつて自己運動するといふ自立的運動形態を有してゐるのである。この自立的資本主義的生産の自立性は、それと他の諸生産との相互関係が資本主義的生産それ自体の内部的な生産関係と生産力との対立関係に内面化されるという点に基く。かくして、資本主義的生産は、部分的生産体であり乍らも、他の諸生産との一切の相互関係——商品形態による外的関連——を単に商品関係の枠内形態の内にとりこ

するだけではない。それは併働力を商品とし、商品による商品の生産関係を確立することによつて、他の社会的生産との関係を資本主義的生産の内部に還元し、考察しうることにするのだ。ここにこそ資本主義的生産がたかた社会的生産の全体をおろし尽したかの如き觀念を起さしめる根拠があるのだ。言つてみれば、資本主義的生産は、まさに部分的生産体であるからこそ、他の諸生産との関連を必然的に隨伴してゐるのであり、それらの関連を内面化してゐるのである。この部分性こそ、あたかもそれが総体であるとする論理的展開を可能としてゐるのだ。

それゆゑにこそ、資本主義の本質論は、部分的社会的生産体の接触面に發生した流通形態が部分的生産体を確立し、並にその流通形態の形態を通じてその確立された社会的生産が他の社会的生産に働きかけるものとして、又単に働きかけることしか出来ずに終るものとして、いはば、部分的社会的生産の形成、確立、崩壊のプロセスの内面的過程として編みこまねばならぬ。本質論は、過程全体の本質、必然性を明らかにするものでなければならぬ。

重商主義および自由主義段階の傾向のみを捉えようとする守野原論は、資本主義の全体を明かにするものとは

言ひえなりのものためであつて、紙料を資本主義社会を想定するにしろのは、まさしく觀念論に陥るとせぬばならぬ。

このように、帝國主義段階の資本主義を内面化していなりとらうことは、宇野原論においてはおも三篇分配論に種々の問題を残す事となるのであるが、最大の問題は、累進循環のメロセスとして現象する資本主義的生産の現実的過程から、資本の商品化への移行と、資本の商品化を以つて終結するところとに集約されてくる、と考へられる。

原論は、恐慌、不況、好況を経過する資本の現実的蓄積過程を、無論、価値法則の貫徹して行くところの現実的枠構として把握するのであるが、然し、資本主義的生産が全社会を包摂し尽せる如き生産体であり、又、商品形態が人間生活の生産活動にとつて眞に内面的なものであるならば、価値法則の貫徹形態である累進循環は矛盾を解決しうるものとして、すなわち、資本主義的生産関係をますます無限に拡大して行く枠構として、原論の最後にするわうその再生産する階級関係と共に設定されても疑問は残らざらぬばならぬのだ。だが事實は、累進循環とらう現実的枠構の喪失となつたのであり、累進循環のメロセスの生み出した生産力の拡大は、生産力と生産関係の矛盾をその根柢たる

生産設備の破壊と更新とらう形において現実的に処理するのにはなくては、別の形式の下に処理せざるを得ざらう要請となつて居るのである。これこそ、集中、合併とらう形での過剰資本の温存であり、株式会社形態は、集中合併の手段とらう新たな経済的役割を担うものとして始めて歴史的使命を得得したのである。二の、金融資本段階を基本的に決定する株式資本とらう資本の様子は、それゆえに、原論の内部に、資本の矛盾を形式的に回避することしか出来ぬものとして、資本がとらうる最後の姿態として位置付けられねばならぬ。

二の事實は、原論の論理からいへば次のような形で内面的に反映される。諸資本は互に利率の不均等を許しえなりのものとして相互に相対し、競争しつゝあるのであるが、商業資本、貨幣資本の媒介によつても利率の均等は達成されえず、生産過程の固定的制約は資本の足もとにまとわりついて残る。恐慌は個別資本の激烈な競争によつて資本設備を大量に価値破壊することによつてこの固定資本的制約を解決し、恐慌に続く不況期における個別資本的資本蓄積によつて新たな生産力水準と新たな価格体系による生産の社会的編成を可能ならしめるものに代るなり。ところが固定資本の巨大化とともに、恐慌による大量の資本価値の破壊がもはや資本主義的生産そのものにとつて耐

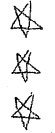
文得なく存するや、資本主義は利率の均等化に對する固定資本的制約を解決する向うの現実的枠構をも有するものなり。もはや、現実の産業資本の利率の不均等はそのまま残しておいて、貨幣市場において形成される利率に、各資本の利率を規制するにらう形式以外にはなかりとらうことになる。即ち、資本の利率を利率で還元した、現実の資本価値とは別の社会的貨幣資本の形態が、現実資本に對して規制されるのである。こゝに於いて、各資本は夫々相異なる利率を有するも、利率の規定と利率の規定は、利率の規定に於いて統一され（利率の利率化）、現実資本の利率の不均等は、規制された貨幣資本の利率の均等性において形式的にのみ解決されることになる。だが利率に對する均等化は、あくまで現実資本の規制せる貨幣資本にとつての利率の均等性であり、現実の利率の不均等を放置しておく以外にはなかりとらう事實は、まさに、資本主義的生産が社会的生産の全体を編成し得なりとらうことを暴露するものにほかならぬ。

このように考へるならば、株式資本は、とりもなおさず、金融資本の中心的概念であつて、帝國主義段階の資本主義は、イギリス、ドイツ、アメリカの個別的歴史事情による相違はともかくとして、一つの株式資本を基礎にして把握されねばならぬ。そして原論の内

部にもさういふものとして位置付けなければ、その原論の展開する資本主義論は、現実を分析する武器にはなれないのだ。宇野経済學が、原論と段階論、分析論の區別を説き乍らも、彼等の手によつては、世界資本主義の分析と暴露が出来なかつたのは、その方法論とその資本主義観の問題があつたのだ。帝國主義段階の資本主義とは全然無関係な原論が、どつして帝國主義論の善き糸を引得るのだらうか？ 宇野原論は、二〇世紀資本主義にとつて無関係であつた以上、二〇世紀のアメリカ資本主義を分析しようとした宇野井によつて始めから脇に放り出されたのも、仕方がないと言つて言いえぬことはないのだ。

資本主義の原論は、社会的生産の全体からみれば部分的生産体として發生し他の社会的生産に對して、それ以前提としてつゞそれに働きかけを行つてきた部分的生産体の生成、成熟、没落を内面的に反映して居るものである。原論の内部から帝國主義段階の資本主義を放逐し去つてはならぬのだ。そして、同時に、世界資本主義の形成と確立、没落の事實的展開を叙述する世界資本主義論が、その原論の基礎になされねばならぬ。宇野原論はまさにこのようにして止揚されねばならぬにも拘わらず、宇野井は、その内面的な作業を放り出し、全く無媒介的に部分的現象の中に埋没したので。

この世界資本主義の解明とその崩壊の事態の暴露の作業は、鈴木鴻一郎および岩田弘氏等によつて開始されたのである。そして彼等に見習つねばならぬのは、守野原論の批判は、これを資本主義の歴史的事実と根拠を求めると同時に、マルクス資本論の飽くことを知らぬ研究に求めたところである。それはマルクス資本論の徹底的な再検討であり、再構成という形をとつた。殊に錯相したオーストリアの理解において、マルクスの核心を抽出する点において、際立つた成功を示したのであり、それをしには、資本主義と最も鋭く対立する資本主義観の提呈は不可避である。



安保斗争の輪郭をその階級的敗北と内面的崩壊として捉えるならば、共産主義者同盟がもつていた安保斗争と、それを必至としたところの日本資本主義についての独自の見解、観念の検討は中心にならざるをえない。その場合、オーストリアの資本主義観の核心にあつたのは、とりもなおさず、守野経済学存の点であつて、それに基づいたオーストリアの情勢分析こそ問題にならざるを得ないので。この点においても守野経済学が単に原論の世界の問題としてしか現われず、分析の立場を遂に提供しえず、それゆえに、オーストリアは現代資本主義を革命的に

捉えることができず、遂に革命は、安保及び三連斗争という決戦とは全然別の、無関係の世界に、永久の彼方に想念されることゝなつた、というところこそ問題はあつたのだ。

革命的事態は、現代資本主義の下においては常に問題にせざるを得ないほど、現実の世界資本主義は、内面的力と統一の体系をなして行つて行つていく。それゆえに、現代資本主義には、内乱と革命が不可避であると見做す。今の状況にとつて必要を教訓ではないだろうか。

安保斗争におけるオーストリアの崩壊が、我々に要求しては、まさに、世界資本主義に對する革命的な資本主義観と現代資本主義の危機の様相をその核心において捉え、プロレタリア世界革命の展望を与える分析論——これである。

我々の前には、岩田論文等の新たな資本主義論が出現してゐる。これは有力な手がかりであらう。これを手がかりとして使ひ得るのは政治的実践の媒介をもつ我々であつて、それゆえにこそ我々の任務は重大である。

◎次号予告 (No 5)

六月下旬発行
内容 向坂(社会党左派)理論批判
ローザ・ルクセンブルグ批判

◎固定購読募集ノ

一部一〇〇円、申し込みは毎月迄。

